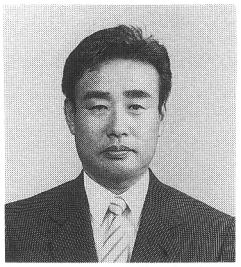
南西諸島の海底
―水没した古陸の謎―



琉球大学
理学部海洋学科　木村 政昭
Masaaki Kimura

略　歴

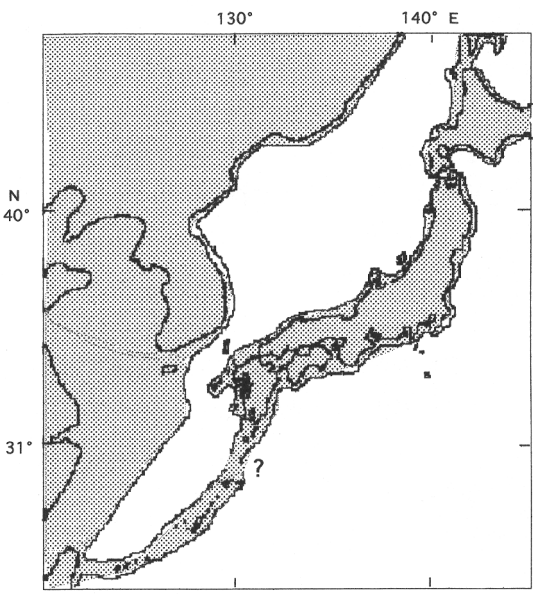
1940年　神奈川県横浜市に生まれる
1968年　東京大学理学系大学院（海洋地質学専攻）博士課程修了
1968年　日本学術振興会奨励研究員
　　東京大学海洋研究所研究生
1970年　通産省工業技術院地質調査所勤務
1976年　総理府技官に併任　米コロンビア大学ラモント・ドハティ地質研究所へ長期出張
1977年　琉球大学勤務　現在に至る（助教授）

1.　はじめに

チャーチワードによると，南太平洋中央部に巨大大陸があり，そこに世界最古の文明がおこったという。そのムー大陸が今からおよそ1万2千年前に火山活動を伴った地下の陥没により水没した。昔陸だったところが，今は海になっている。そうだとしたら，それはどのようにしてわかるのだろうか。それをわかろうとするのが，私の専門としている海洋地質学の主要なテーマの一つである。

では，今から数万年前より新しい時代に，太平洋中で水没した大陸が彼の指摘する南太平洋を中心とした広大な地域に，現実的にあったことが考えられるであろうか。残念ながら，これまでの海洋地質学的研究の成果はそれを否定する。なぜなら，そこには大陸性地殻はなく，また火山活動は周辺で部分的に行われているだけで，大部分は安定地塊であるからだ。

ところが，それからほど遠からぬ西太平洋の一角で，水没した陸地が見つかった。近年，海底の調査の進歩はめざましい。海洋科学技術センターの「しんかい2000」等を用いた，南西諸島周辺の海底調査の結果，相当規模の古陸の存在が明らかとなってきた（図―1）。それは，更新世後期という地質学的には非常に新しい時代に，地殻変動を伴いながら急速に水没したと思われる。これに



図―1　2～3万年前の日本の古地理図．アミ部が陸

は，地殻変動によって水没したとされるムー大陸の水没を暗示させるものがある。はたして，そこにどのような謎が隠されているのだろうか。

2. 延長千キロをこす海底の古陸

沖縄本島の港川という所で発見された港川人は，今から1.9万年前に生きていた日本人の祖先とされる人間である。鈴木　尚東大教授（当時）は，その人達は大陸から歩いて渡来してきたと推定した。このほか，南西諸島の陸上に産出する化石の研究から，今から1.8万年前のウルム氷期にイノシシが大陸から渡来してきたとの研究もある。人間が渡ってこれるような陸橋，そのようなものがあったのであろうか。

そこで海底の音波探査記録を解析した結果，ケラマ・ギャップと呼ばれる，沖縄本島と宮古島をつなぐ海底の高まりの最深部がつながれば，陸橋が成立するところまでわかってきた（木村，1991a)。ちょうどその時に，「しんかい2000」による潜水調査が行われた。潜水してそこでまず目にしたのは，水深数百メートルをこす海底が，琉球石灰岩と呼ばれるサンゴの化石等からなる岩石が削られてできた平坦な岩盤であった。くぼんだところにはなんと粗い砂があり，浅海底で見られるようなリップル・マーク（波漣）があった。なんと沖縄の海岸がそのまま深海に沈んだような景観であったのだ。ふつう，このくらいの深度で長時間たっていれば粒の細かい泥で被われてしまうのが常識である。これは，沈んでからまだ泥がたまるほど時間がたっていないことが想像できた。また，琉球石灰岩というのは，浅海のサンゴ礁でできたものとされているので，その地域が沈降したのはまちがいない。

水深 935 mの平坦面を作る岩盤の岩石が採取された。それは，琉球石灰岩と呼ばれる岩石であった。その石灰岩の年代は，中に含まれる顕微鏡でみなければわからないほど微小なナンノ化石と呼ばれる化石から，およそが27万年前より新しいものであるということがわかった。そして，ツキヒガイと呼ばれる二枚貝の化石の年代が，ESR法（格子欠陥法）により24万年前と10万年前の2つの値がでた。これにより，本域は24万年以後，おそらく10万年前頃に陸であったと判断された。

そして，その基盤岩の侵食面上を広く被覆する海底堆積物の年代は，タンデトロン法により19,000−20,000年前とでた。この装置は，耳かき一杯ほどの試料で測定できるようになった新兵器である。ここでは，基盤岩の年代と被覆している堆積物との間で，20万年間にわたる地層の欠如が発見された。このため本域は，およそ10万年から2万年前までは，基本的には陸域であったと推定された。そのうえ1991年には，「しんかい2000」により，ゾウ類と思われる大型哺乳類の化石が採取された。大型哺乳動物は，陸橋を歩いてわたってきたはずであるから，今から2万年前頃までのいつかに大陸と連続する陸橋があったことが確からしくなってきた。しかし，断定するにはまだまだ海底の試料が足りない。

その後，北方のトカラ海峡の調査もすすめられた。1992年には「しんかい 2000」で潜水調査をすることができた。そこの最深部付近（水深1,300 mをこす）でも，すでに琉球石灰岩と同年代の石灰岩がドレッジされていた。潜水調査により，およそ1億年ほど前の四万十帯といわれる古い岩盤が露出していることを確認することができた。この結果もケラマ・ギャップととても良く似ていることから，今から2万年前には，中国大陸から沖縄本島へつながっていた陸橋はさらに九州本土にまでのびてきていた可能性がでてきた。また，これまでの試・資料を良く検討すると，陸橋には何本かの水路があったことも推定された。これについてもっと詳しく知りたい方は，木村ほか

(1992, 1993) を見ていただきたい。

これを，信頼できる他の研究者の結果に加えて古地理図を作ったのが図—1である。最近の他の専門家の研究によると，対馬海峡や津軽海峡は，ウルム氷期の海面低下時（およそ2万年前）には切れている事が発表されている（Oba et al., 1991)。それが正しいとすると，日本では，ウルム氷期に大陸とつながっていたのは琉球列島だけとなる。したがって，琉球陸橋の真偽を確かめる事がいかに重要であるかおわかりいただけると思う。

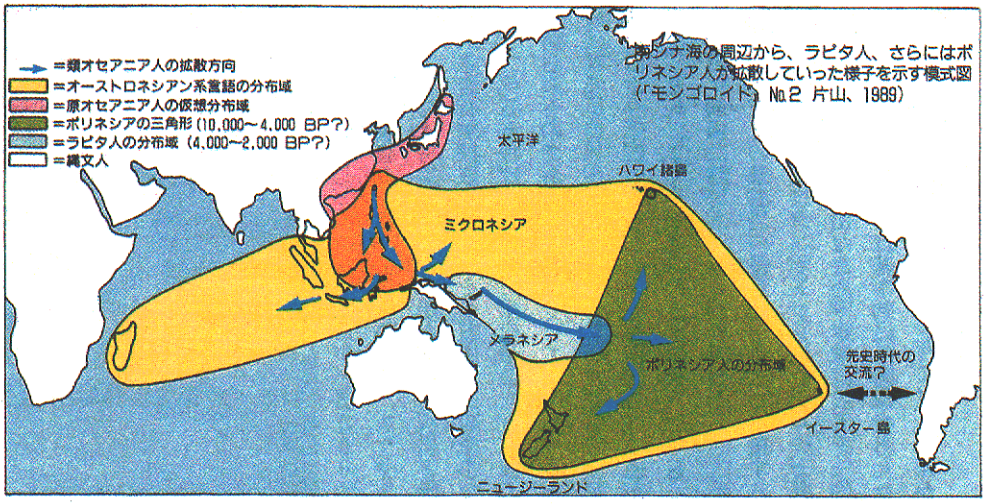
3. 陥没をおこした海底のガスベルト

次に，古陸の消滅時期については，ウルム氷期の最大海退時のおよそ2万年前以降，地殻変動と海水準変動を伴って急激に水没したことがわかってきた。そのピークは1.5−1.2万年頃とみられる。その際大きな役割を果たしたのが，陸橋を胴切にする正断層運動であった。また，この陸橋の崩壊を港川人達は見ていた可能性がある。というより，陸橋の崩壊とともに全滅に近い状態になってしまったのかも知れない。その後，今から6,000年ほど前までのおよそ1万2,000年間南西諸島からは人の遺跡や遺物が出てこなくなるからだ。

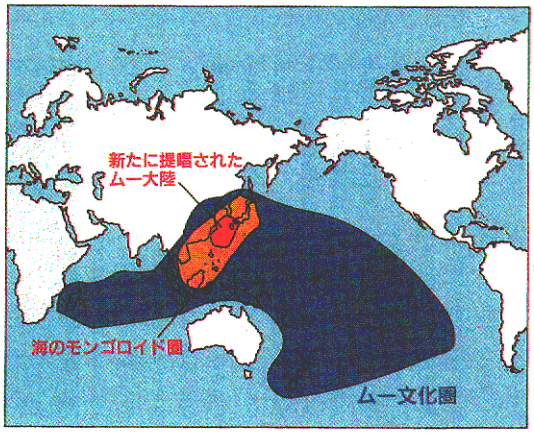
その陥没を起こした原因は，南西諸島海溝のもぐりこみと，陸橋の西側にある沖縄トラフと呼ばれる陥没域の陥没の進行によるものであろう。地の裂け目（リフト）にあたる，沖縄トラフの中央地溝へのマグマの上昇が一時的な陸地の上昇を促し，最後の陸橋が出現し，いわば沖縄トラフのリフティングに伴う一種のガス抜きによる古陸の水没がおこったと推定される。

4. 太平洋の失われた大陸説

イギリスの軍人であったチャーチワードの著書『失われたムー大陸』で代表される一連の著書によると，かつて太平洋沖に「ムー大陸」があったという。チャーチワードが指摘する，かつてムー大陸があったとされる場所は，いわゆるポリネシア三角地帯とされる地域を中心とした地域である。最近の有力な説では，ポリネシアの人々の祖先にあたる人達（海のモンゴロイド）は，今から4,000年以前は日本からフィリピンを経て，ボル



図—2 類オセアニア人の拡散を示す図（片山，1991による）



図—3　新たに提唱されたムー大陸（?!）（木村，1993）

ネオ，セレベスを含む地域に住んでいたとされる（図—2）。そこが，いわゆるムー文化圏（竹内，1980，1990）のルーツと言ってよい所である。言ってみれば，チャーチワードの言うムー大陸があったとすれば，それは，西太平洋の海のモンゴロイド圏のどこかになければならないことになる。

このなかで，旧石器時代の人類化石が見つかっているのは，中国華南－琉球列島－日本列島にかけてであり，当然その一帯は古い文化圏に属す。琉球列島には，3万年より古い山下町人や2万年前の港川人（M人すなわちムー人と読みたくなる！）が居た。また九州からは，1万2千年前の世界最古の土器が出土し，また，日本で書かれたと思われる最古の文字は琉球列島の種子島から出土している。この古い歴史をもつ一角南西諸島海域で，人類史はじまって以来の大陥没がおきたとしたら，ここで起こった陸塊の大水没の話がインドにまで伝わっていたこともありえない話ではない。

一方，ムー大陸の検証に最も大切とされる，チャーチワードの粘土板のそれと共通すると思われるシンボルを描いた石板が，沖縄島で見つかっている（木村政昭，1991b）。したがって，チャーチワードのイメージするムー文化ともはからずも一致する点がある。

5.　水没を物語るニライ・カナイ信仰

チャーチワードのムー大陸説の論拠を知るのに，最も重要なインドの古寺にあった粘土板は，今は誰も見ることができない。しかし，チャーチワードが想像したほどの広い地域に大異変がおこったのであれば，周辺地域でも関連する言い伝えか何かが残っていても良いはずである。すなわち，東方にユートピア的な所があって，そこが急激に水没してしまったという話がインドに伝わっていて，それをたまたま西洋人のチャーチワードが聞いて，興味を示したという構図が現実的だからである。するとまず，琉球古陸の水没が，伝説に残るようなものであったかどうかの検討が必要となる。

琉球列島には，よそでは知られない「ニライ・カナイ」信仰がある。これは，奄美大島以南の琉球列島全体に伝わる信仰で，現在の風俗・習慣にも広くその影響が認められる。いろいろ解釈があるが，つきつめてゆくと海底に自分達の理想郷があるという解釈がなりたつ。そこに竜宮があるともいわれている。現在の南西諸島の民俗行事の多くも，このニライ・カナイに豊饒を願うという点で一致している。それは，自分たちの祖国の水没が伝えられたものと解釈できる。

6.　中国の東方ユートピア観

6.1　中国版「ムー大陸」伝説

中国戦国時代の列禦冦（れつぎょこう）（紀元前400年頃）の作とされている『列子・湯間第五』に，「渤海の東。幾億万里なるを知らず。（中略）其中に五山あり。一を岱輿と云ひ。二を冒嶠と云ひ。三を方壺と云ひ。四を瀛洲と云ひ。五を蓬萊と云ふ其山高く，下周旋三万里。其頂の

平處は九千里。山之中間相去ること七万里。以て隣居となす。其上の臺観皆金玉なり。……」とある。

『列子』は，古来，毀誉褒貶の多い書で，著者と伝えられている列禦冦の歴史的存在すら否定され続けている。ここで，蓬萊山に注目してみたい。その島の周囲が3万里とあるが，これを漢代の標準里程で換算するとおよそ12,000 kmとなる。これは，東西8,000 km，南北5,000 kmとされるムー大陸の周囲に匹敵する大きさとなる。なんと，ムー大陸のルーツはここにあったのかと疑ってみたくなるほどだ。しかも，その上の台観すなわち高殿は金玉でできているという。そこへ飛来する仙聖が数えきれないほどというから，これは金銀を用い，平和な人々が約4,800万人居たというムー大陸のそれにもひけをとらない話である。

しかも，付近の龍伯之国に大人が居たという。これがイースター島のモアイのルーツかも知れないと思わせる。少なくとも，巨人の考え方がここにもあるということである。1868年というから，ちょうど明治元年，チャーチワードがインドでムー大陸の話を聞く。『列子』の今本の大部分が，魏・晋時代の道家の作としても，少なくとも魏・晋時代の中国人の東方観にこのようなものがあったとしたら，チャーチワードがその影響を少なからず受けたことは考えられる。そうしたら，チャーチワードが大陸を太平洋の真ん中にもってきたとしても不思議はない。

6.2 徐福の海中三神山探索

時代としてはこの後，秦（しん）の始皇帝の仙薬探しがはじまる。この話は，紀元前145年（あるいは135年）に生まれた，司馬遷により紀元前92年頃完成された『史記』に記されている。これは最近，史実と認められている。始皇帝が，仙薬を求めての旅で徐福に会う。徐福は徐市（じょふつ）とも言い，山東省，斉（せい）の人である。五帝の流れをひく名家の出である。『史記・秦始本紀』に斉（せい）人徐市（じょふつ）ら上書し，「海中に三神山あり，名を蓬萊（ほうらい），方丈（ほうじょう），瀛洲（えいしゅう）といふ，僊人之に居る，請う，斎戒し，童男女とこれを求めん」と言う。ここにおいて徐市をして童男女数千人を発し，海に入りて遷人を求めしむ。」とある（丸山・守屋，1988，p.103）。つまり，海上に蓬萊，方丈，瀛洲（えいしゅう）という三つの神山があり，遷人（仙人）が住んでいると言うのである。

『史記・封禅書』によると，仙草探しは，徐福が初めてではない。それより先，斉の威王・宣王の時代から海に乗り入れて蓬萊・方丈・瀛洲の三神山を求めさせることが始まったとある。そして燕の方士もそれに関係したという。『封禅書』に言う，「言いつたえによれば，これらの山は渤海のなかにあり，人界からさほどへだったっていないが，残念ながら目の前まで来ると風が吹いて船が引き離されてしまうのだという。しかし，いきついた者もあったらしく，そこには多くの人が住み，不死の薬もある。物はみな鳥や獣まで真っ白で，黄金づくり白銀づくりの宮殿がある，遠くから眺めると雲のように見えるが，近づいてみると水中に沈んでいる，のぞきこもうとすると，風が引き離してしまうというのである。だから君候たちはみなこの話に心をひかれて探し求めさせたのだった。」（丸山・守屋，1988，p.108−109）とある。これは実際に1年に1度海に顔を出す，宮古島の八重干瀬が水没してゆくのを見た中国人か沖縄人の話が伝わった可能性もある。

それにしても，水の下の三神山とは，まさに海底のニライ・カナイの話そのものにみえる。神山には黄金づくり白銀づくりの宮殿があるというのであるから，これはムー大陸のそれをほうふつとさせる。これより伺えることは，意外にも三神山は無人島ではなかったということである。日本で

ただ1カ所沖縄の那覇から，燕の明刀銭が出土しているが，この頃の方士で三神山に行き着いた者が持ち運んだものかもしれない。

当然徐福は，その話を倭人かあるいは関係者から聞いていたであろう。あるいは，済州島，壱岐，琉球，日本本土，台湾などに上陸，あるいは定住してふたたび大陸に戻ってきた人びとから，こうした未知の地域の情報を得て，貴重な知識としたであろう。数千人をつれての大航海である。そうでなければ，船を出すはずがない。徐福は，東方の島のことについてはかなり確かな情報を得ていたはずである。

そして徐福らは，東方海上に乗り出す。『史記・秦始皇本紀』には，紀元前219年（始皇帝28年）の条に，「童男女数千人を発し，海に入りて僊人を求めしむ」とある。『漢書・五被伝』では，「徐福をして，海に入りて仙薬を求め，多く珍宝をもたらし，童男女三千人，五種・百工にして行かしむ。徐福，平原大沢を得て，止（とど）まりて王として来らず」とある。また，『盧山記』には，1,000人の童男女，五穀の種子のほか航海，天文，呪術，作士（造船），記録，薬司官などを五百艘の船に分乗させたとある（以上三谷，1992，P.100)。『史記』の徐福渡航の記載については，司馬遷は，彼の時代より1千年前の殷王朝について正確に記していることから，彼の生まれるよりわずか70〜80年前の徐福に関する記事を誤って書くわけがないという理由から，非常に信憑性が高いとされている。したがって数千人というのは正確であるかもしれず，少なくとも三千人は行ったとの見方が有力である。これが本当とすると，これはまさに東方ユートピア探しを地でいった事実となる。

ところが，始皇帝37年というから紀元前210年，徐福が出発した紀元前219年より数えて10年めに徐福がもう一度始皇帝の前に姿を現す。『史記・秦始皇本紀』に，「常に大鮫魚（こうぎょ）に苦しめらる。故に至ることを得ず。願はくは善く射るものを請いてともにせん。見（あら）わるれば連弩（れんど）をもってこれを射ん」（丸山・守屋，1988，P.118）と訴えた。一方，『史記・淮南（わいなん）衡山（こうざん）列伝』では，彼が蓬萊に行ったことが書かれている。すなわち，海神に会って，不老長寿の霊薬を見せてもらうところまではこぎつけたが，始皇帝が託した礼物が少ないという理由で，譲ってはもらえなかったというのである（三谷，1992，p.156−157)。『史記・淮南衡山列伝』には，「還りて偽辞を為して曰く，臣，海中の大神を見る。言ひて曰く，汝西皇の使なるやと。臣，答へて曰く，然りと。汝何を求むるやと。曰く，願はくば延年益寿の薬を請ひ願はむと。神曰く，汝の秦王之礼薄ければ，観ることを得れども取ることを得ずと。即ち臣を従へて東南の蓬萊山に到，芝で成れる宮闕を見る。使者有り，銅色にして竜形，光上して天を照らす。是に於て，臣再拝して問ひて曰く，宜しく何を資して以て献ずべきや。海神云く，令名の男子若しくは振女，百工を以てすれば即ち之を得むと。秦皇帝大いに説（よろこ）びて，振男女三千人を遣（つかは）し，之に五穀の種と百工を資して行かしむ。徐福，平原広沢を得，止まり王となりて来らず」とある。

この書は，徐福が渡海したとされる前219年より100年近くたった時であるので，同じ『史記』の中でも，前者と伝承の内容が変化したとの見方がある。しかし，後で述べるように沖縄との関係からみると，あるいはこちらの方が情報量が増え真実を伝えているともみえる。この時は，「童男女三千人をつれて再び海に入った。そして徐福は，平原広沢，あるいは平原大沢を得て，そこで王となって帰ることはなかったと記されいる。徐福らは，蓬萊の地に留まり，そこで平原広沢を得て永住したと解釈される。その「蓬萊」とはどこであろうか。

実は，後年呉孫権がその蓬萊探しを行った。晋の時代に書かれた，陳寿撰の『三国史・呉孫権伝』に，「（黄龍）二年春正月・・・将軍衛温・諸葛直を遣わして甲士万人を将（ひき）い，海に浮びて夷州（いしゅう）及び亶州（たんしゅう）を求めしむ。亶州は海中に在り。長老伝えて言う。奏の始皇帝，方士徐福を遣わし，童男童女数千人を将（ひきい）て海に入り，蓬萊の神山，及び仙薬を求めしむ」（三谷，1992，P.101）とある。呉の孫権とは，卑弥呼王成立直前の人である。このように，彼は亶洲を探したが見つからなかった。

6.3　徐福らはどこへ行ったか

ここで徐福らがどこへ行ったか，従来の説を整理してみたい。徐福らが渡って行ったところは，いろいろと推測されている。その主な候補地は，北は東北日本から南は海南島までの範囲に入るようである。『孫権伝』では，蓬萊島は亶州にあたるといわれているから，夷州は方丈か瀛洲となる。

そこで，これまでにあげられている蓬萊島の候補地をあげてみる。

①　これまで，夷洲は台湾，亶洲は済洲島という説が有力視されている（たとえば石原，1951）。それは，『隋書』に済洲島が「亶羅国」として出てくるためである。

②　種子島を亶州とする説がある。これは亶の発音が似ているためと，同時代に中国の影響を受けたと思われる遺物が出るためである。

③　日本本土。これは，徐福伝説が数多く伝わっているからである。日本で徐福伝説で名高いのは，紀州熊野と駿州富士である。それに尾張熱田を加え，それぞれ蓬萊と呼ばれる土地がある（木木道春『神社考』）。しかし遺物からは，徐福らの定住地点としては，吉野ケ里が有力視されている。吉野ケ里の弥生遺跡から出た人骨は，渡来系弥生人であり，その原郷は，揚子江下流域から黄河の南地域，すなわち，江南から山東半島までの地域に限定されうるということからである。華南でも華北でもなく，華中であるところまで推定の輪がせばめられるからだ。

④　亶州は，今の海南島とする説がある。しかし，これは『史記正義』に括地志を引いて「亶州在東海中」とあることより，方向が違うのが難点である。

⑤　1458年に作られた首里城の「万国津梁の鐘」には，「琉球国は，南海の勝地にして，三韓の秀を鐘め，大明を以て輔車と為し，日域を以て唇歯と為す。此の中間に在りて湧出する蓬萊島なり。舟楫を以て万国の津梁と為し，異産・至宝は十方刹に充満せり。」（原文漢文）（沖縄県立博物館，1992，p.18）と琉球国が「蓬萊（ほうらい）島」と明記されている。この蓬萊島という名がどういう根拠に基づいて記されたか明らかではないが，蓬萊島沖縄説をとる学者は沖縄県では多いとのことである（長浜，1992）。

遺跡的には，亶洲といわれる広田遺跡とほぼ同じ遺物が沖縄にも出土する。それらは，南西諸島の島々，特に奄美，沖縄島，久米島等に産する。その意味では，南西諸島全体に徐福らの痕跡を見ることができるといえる。

7.　琉球の祖神アマミクと徐福グループ

7.1　アマミク伝説

沖縄には，徐福の出自した中国山東省から，琉球開闢の祖とされる天孫氏が来着したとする伝承がある（佐喜真興英『南島説話』）。たしかに，アマミク伝説（外間，桑原，1990）は，徐福渡来を暗示させる。アマミクは，渡来者を表し天孫の総称であり，琉球の祖神とされている。アマミクは女，これと対になるシニリクは男である。当時，琉球列島を次々とアマミクは南下してきたという。

中国を出発した徐福らは，済洲島を通りおそら

く佐賀へ着いたであろう。そこから蓬莱山を目指して南下した。一部は紀州から富士へ漂着したものが居たが，他は琉球列島を南下したはずである。これからの話は，アマミクの出現と整合的にみえる。

徐福らをアマミクの一行と見立てると，彼らは島々を南下してついに沖縄島に至った。那覇付近で王に会い尋ねたところ，南東の方向に不老長寿の薬があることを聞く。そして，海路を南東の方に蓬莱山をめざして行き，久高島に着き，ヤハラツカサに行く。そこから上陸する。そこにサルのコシカケにかこまれた王宮があったというが，それはおそらく「玉城（たまぐすく）城」の前身と考えてよいだろう。その地域に次のような伝説がある。

『琉球国由来記』（1713 年刊）の『聞得大君御殿並御城御規式之次第』のなかに，「聖なる世界「ニライ・カナイ」から久高島に穀物の種の入った小さな甕（かめ）が漂着したが，シラネチャ（稲の種）がひとつ足りなかったので「アマミキョ」が天に祈って，鷲を「ニライ・カナイ」につかわして求めさせたら，300 日目に 3 本の穂をくわえて帰ってきたので，それを「ウケ水，ハリ水」（ウキンジュ・ハリンジュ）に蒔いた」とある。また『中山世鑑』（1650 年刊）には，つぎのような伝承が記録されている。「阿摩美久，天ヘノボリ，五穀ノ種子ヲ乞下リ，麦・粟・菽・黍ノ，数種ヲバ，初テ久高島ニゾ蒔給。稲タバ，知念大川ノ後，玉城ヲケミゾニゾ芸給」。

アマミク（アマミキョ）が，那覇の南東部にある知念半島から鳥をニライ・カナイにつかいにやり，鳥がもってきた種子により稲作がはじまったというのである。そのためアマミク達は，国作りの祖とされた。アマミキョが，ニライ・カナイへ使いを出して 300 日して鳥がイネをくわえてもどってきたところは，一度徐福が中国へもどったことと符号している。玉城城で不老長寿の薬を乞うたところ，だめだと言われたため，いったん中国へ帰って五穀をはじめとした物資をもってくるということになろう。徐福の渡海は，実は不老長寿の薬のためだけでなく，徐福が理想郷建設をめざしたという憶測は良くされるところである。徐福村のある江蘇省の北部に当たる連雲港市は，古くからの米作地帯である。それとイネをもってきたアマミクの話とは符号する。

このほかに，彼等をアマミクではないかとする理由はまだある。南島へ来る武士達は，まず男づれだろう。歴史上にのこる女づれは，徐福らが明らかである。この後の孫権らは男のみであったろう。これはアマミク伝説とはあわない。しかも，徐福らには，西王母信仰があったため，女性を表に立てていた可能性はある。そうでなくとも，島の人々には，美しい女群に目をうばわれ，まずアマミクは女性になったと思える。

『開闢神代暦代記』（岩間，1972）によると，徐福らは富士山に，出発より 3 年 3 カ月かかって到着したとある。中国に再び姿を現すのに 9 年かかっているのであるから，このあと琉球へ行った可能性がある。久高島に漂着した甕（かめ）が徐福らにたとえられるかもしれない。このときにはもう，アマミクが居ることから，最初徐福の妻を中心としたグループが先発隊として来ていた可能性もあろう。

7.2　亶州は沖縄でよいのか

そうなると，それより後の世に孫権が探した亶州も沖縄ということになる。万余の船でさがしたため，関係者が南西諸島に来たであろうということはすでに幾人かの専門家によっても指摘されている。彼らが，広田遺跡の「山」の字を書いたのではないかと言うのである。ここで，亶州についてもう少し考察を加えてみたい。

①　孫権は，亶州は遠くて見つからなかったが，夷州は大陸に近いため見つかったとしている。このとき，夷州から 5,000 人の捕虜をつかま

え，中国の属国にした可能性がある。それは台湾であるとの見方が強いが，それはうなづける。

② 亶洲は「壇洲」とも書けると言われる。亶洲＝壇洲とすると，隋書の流求に波羅壇洞，壇洞というのが出てくる。その意味では沖縄で良い。また，中山域には，北谷（ちゃたん），読谷（よみたん）がでてくる。あるいは山田も亶を含んでいるのかもしれない。したがって，かつて沖縄本島が，壇洲と呼ばれたことがあっても不思議はないような気がする。

③ 沖縄の宜野湾市真志喜安座間原で，縄文時代晩期～弥生時代中期（2,500−2,000 年前）の 60 体の人骨がでた。この中の一体は，南下してきた渡来系弥生人との混血とみられている。この混血が，もしかしたら徐福らのものではないかと想像できなくもない。

④ 亶洲が沖縄であると，文献にみられるような福洲との交易がうなづける。

⑤ 紀元前 314 年頃，燕は斉によって滅ぼされた。琉球から燕国の明刀銭が出土している。徐福らが来島する前から，大陸と交易が行われていた可能性がある。したがって徐福らが来たとき，既に蓬莱島に宮殿があるということは考え得る。

⑥ アマミクの末裔が邪馬台国を作った可能性があることと，それに渡来人が関連するということとは矛盾しない（木村，1992 a，b）。

8． 西アジアのユートピア観

紀元前 3,000 年前に，『ギルガメシュ叙事詩』という世界最古の叙事詩といわれるものがある。そこでは，永遠の生命を求めて主人公の英雄ギルガメシュ王が，すべての国々をさまよい歩き，険しい山々を越え，すべての海を横切ったことが書かれている。彼は，海の底深くに潜り永遠の若さの植物（棘のある草）を得る。しかし，ギルガメシュが泉で水浴びをしている間に蛇がやってきてこの植物を食べてしまった（以上，矢島文雄，1991）。ところがなんと，この話は，琉球に古くから伝わる「雲雀と生き水」および「生命の水」などの民話とそっくりであることが，ロシアのネフスキーという学者に指摘されている。その琉球には，ニライ・カナイ伝説がある。古い時代より東西の交流（間接的にせよ）が，示唆される。

インドでは，仏典に，大乗仏法が東方で栄えることが予言されている。弥勒（みろく）菩薩（ぼさつ）の『瑜伽（ゆが）論』では，たとえば，「東方に小国有り其の中に唯大乗の種姓（しゅしょう）のみ有り」と東方にユートピアを見出している。

9． ヨーロッパの東方ユートピア観

この地上のどこかに楽園があり，幸福の島があるという思想は，ヨーロッパではアレクサンドロス大王の東方遠征後盛んになる。一つはプラトンの失われたアトランティスで代表される西方指向である。しかし，もう一つの流れは，東方である。キリスト教会は，「エデンの園」を失われた唯一の楽園とし，楽園西方説を異端とした。そしてついには，東方にキリスト教国，プレステス・ヨハネ（つまりプレスター・ジョン）の国があるという有名な説が出た。

折から，1221 年，キリスト教の王が回教徒と戦ってこれを征服しつつあるという話が伝わった。しかしこれはジンギスカンのことであった。またそれは，コロンブス航海の重要な動機となったとも言われてる。ところが，元の国には，「日本」が，夢のような黄金の国だと伝えられていたため，1274（文永 11）年，と1281（弘安 4）年，フビライ皇帝は日本に大軍をさしむけた。17年間フビライにつかえたマルコ・ポーロは，その話を東方見聞録に記したことは有名な話である。

以上みてくると究極的には，東方のユートピア

とは，日本および琉球列島付近にきてしまう。日の昇る方向であるためということがあるかもしれないが，フビライ皇帝のそれは，東方海中に相当な文明をもった国があるという確かな話からきている。

10．日本のユートピア観

それでは，日本本土では，ユートピアはどことされているのであろうか。それは西方極楽世界や南方補陀洛（ふだらく）で代表される西方ないし南方が代表的なものであろう。『法華経』化城喩品では，「彼の仏の弟子の十六の沙弥は（中略）その二人の沙弥は東方にして作仏す。（中略）東南方に二仏。（中略）南方に二仏。（中略）西南方に二仏。（中略）西方に二仏。一を阿弥陀と名づけ，二を度一切世間苦悩と名づく」とある。日本に来て浄土宗（念仏宗）では多くの沙弥の中から西方極楽世界が強調されている。また，『法華験記』によれば，天王寺の僧が熊野に詣でて帰る途中，道祖神が柴舟に乗せられ金色の光を放ちつつ「南方界」すなわち補陀洛（ふだらく）に渡ったとある。熊野修験（しゅげん）の祖である裸形上人（竜樹）もまた衆を化してのち，補陀洛に帰る（真喜志，1993）。

11．まとめ

以上をまとめると，アジアにおけるユートピアは結局中国の東方にあり，日本およびその西〜南に位置することになる。その方面に，古代中国に長年伝わってきた神仙山があった。その地に含まれる古琉球で，人類史始まって以来の広範な陸地の急激な水没がおこった。今に伝わるムー大陸とは，チャーチワードの考えた大陸で，そこには地質学的に大陸はなかったことは明らかである。しかし，そこからほど遠からぬアジア東縁に，まさにチャーチワードが推定した地殻変動を伴いながら急速に水没した古陸があった。

そこに残る沖縄島で，石板が発見されていた。石板に彫られた絵文字のようなシンボルは，チャーチワードの「ムー文字」と良く似ている。そして，チャーチワードの記載しているのと良く似た風習が琉球列島に広く認められる（木村，1991b）。また，チャーチワードが聞いたムー大陸とは，まさに，三神山で代表されるように思われる。西側に大陸があり，ムー大陸は2つの水路で3つの陸に分かれているというイメージは，まさに中国東方の三神山のそれである。3つの陸を現した山型が，ムー大陸のシンボルとされている。

この辺の発想はまさに三神山からきているように思える。現に，徐福の話は，チャーチワードの著書にも出てくる。歴史上，倭人が中国大陸に現れるのは，紀元前771〜720年頃，今から2,700年以上前の縄文時代後期から晩期の頃である。この時は，中国の成王の時で，鴨草（ちょうそう）を献じている。もしかしたら，この頃の彼等の仲間がインドに粘土板をもって現れた「ナーカル」の僧達ではなかったか。ナー（那覇？）から行ったというのは，考えすぎであろうか。三神山の伝説が，インドに伝わっていたとしたら，南西諸島付近にかつて存在した「古琉球」が「ムー大陸」の実像と言って良いことになる（図―3）。

琉球の正史である中山世鑑によると，琉球王国は1万7千年前にはじまったとされる。この真偽のほどは明らかでないが，これをまともにとると，チャーチワードの言う1万2千年前の水没前の王国ということになる。また，ムー大陸では，金・銀が良く使われていたとされているが，まさに琉球は，古代に金の国として識られていたことが指摘されている。たとえば，田山花袋が明治34年に編んだ『琉球名勝地誌』は，宜野湾の金宮について，「その地に行き土石を見るに皆金銀

なり，父勝連按司，大夫を遣わしこれを取らしむ」とある。これは，『おもろさうし』にみられる謝名村の黄金伝承によったものであろう（真喜志，1993）。

それに加え，琉球列島では，日本本土ではみられないような，人類が全滅するような洪水伝説が伝わっている。これは，陸橋の崩壊時のものかどうかは別として，琉球列島が過去，人が居なくなるほどの大津波を経験していることを物語っていよう。歴史時代に琉球でおきた，俗に明和の津波と呼ばれるものは，ギネスブックにのっている世界最大級の津波である。チャーチワードは，自著の中で，1923 年の関東大地震もムー変動の一連のものと受けとめている。ムー大陸水没運動は，そのような形で現在も日本・琉球列島弧で継続していると言ってもよい。

謝　辞

梅光女学院大学の国分直一教授には，広田遺跡の貝符等についてご教示いただいた。また，琉球大学の比嘉政夫教授には，ギルガメシュ叙事詩に関する教示を得た。瀛洲（琉球群島）徐福会の高柳弘幸氏には，徐福に関する資料について助言をいただいた。ここに謝意を表したい。

参考文献

1) 外間守善・桑原重美：沖縄の祖神アマミク．築地書館，東京，149p.，(1990)
2) 石原道博（編訳）:魏志倭人伝他三編．岩波書店，東京，167p.，p.59，(1951)
3) 岩間　尹：開闢神代暦代記全．三浦一族会，321p.，(1972)
4) 片山一道：ポリネシア人－石器時代の遠洋航海者たち．同朋舎，東京，271p.，p.229，(1991)
5) 木村政昭：音波探査記録からみた琉球弧の第四紀陸橋．中川久夫教授記念地質学論文，p.109－117，(1991a)
6) 木村政昭：ムー大陸は琉球にあった．徳間書店，東京，245p.，(1991b)
7) 木村政昭：邪馬台国の位置に関する一考察－海洋学的視点をベースとして－.南島史学，No.39，p.21－43，(1992a)
8) 木村政昭：南海の邪馬台国．徳間書店，東京，270p.，(1992b)
9) 木村政昭・松本　剛・中村俊夫・大塚裕之・西田史朗・青木美澄・小野朋典・段野洲興：沖縄トラフ東縁ケラマ鞍部の潜水調査－ウルム氷期の陸橋か?－．第 8 回シンポジウム報告書，p.107－ 133，(1992)
10) 木村政昭：沖縄海中にあったムー大陸の痕跡．歴史 Eye，Vol.3，No.8，p.14－18，(1993)
11) 木村政昭・松本　剛・中村俊夫・西田史朗・小野朋典・青木美澄：トカラ海峡の潜水調査－沖縄トラフ北部東縁のテクトニクス－．第 9 回しんかいシンポジウム報告書，(1993)（印刷中）
12) 真喜志きさ子：琉球天女考．沖縄タイムス社，那覇，269p.，p.102，(1993)
13) 丸山松幸・守屋　洋：史記III 独裁の虚実．徳間書店，東京，281p.，(1988)
14) 三谷茉沙夫『徐福伝説の謎』．三一書房，東京，235p.，(1992)
15) 長浜博文：沖縄にあった邪馬台国．沖縄社研出版，那覇，223p.，p.67，(1992)
16) Oba, T., M.Kato, H.Kitazato, I.Koizumi, A. Omura, T.Sakai and T.Takayama : Paleo-environmental changes in the Japan Sea during the last 85,000 years. Paleoceanography, Vol. 6, No.4, p.499−518, (1991)
17) 沖縄県立博物館（編）：復帰 20 周年記念特別展琉球王国～大交易時代とグスク～.沖縄県立博物館友の会，首里，200 p.，(1992)
18) 竹内　均：ムー大陸から来た日本人．徳間書店，東京，245p.，(1980)
19) 竹内　均：ムー大陸から来た日本人　再び．徳間書店，東京，255p.，(1990)
20) 矢島文夫訳：ギルガメシュ叙事詩．山本書店，東京，208p.，p.124−127，(1991)